



## 手指の巧緻性と自信を高める衣生活教材の開発： 小学校家庭科における「糸結びテスト」実践の可能性について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-02-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗山, 凌, 小松, 恵美子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00006638">https://doi.org/10.32150/00006638</a>

## 手指の巧緻性と自信を高める衣生活教材の開発

— 小学校家庭科における「糸結びテスト」実践の可能性について —

栗山 凌・小松恵美子

北海道教育大学旭川校 衣生活学研究室

## Development of Teaching Materials for Clothing Life to Enhance Skill and Hand-finger Dexterity

— Possibility of Practicing 'Yarn Knotting Test' in Elementary School Home Economics —

KURIYAMA Ryo and KOMATSU Emiko

Clothing Science Laboratory, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

### 概 要

本研究は、家庭科の授業が始まる小学校第5学年の児童が、衣生活分野で初めて学ぶ裁縫の技能取得や定着において必要とされる手指の巧緻性を高め、自信を持つことを目指し、その手だてとして、太田らが考案した「糸結びテスト」が、有効な教材になるかについて、大学生を対象としたアンケート調査および糸結びテストの結果分析を基に検討を行った。さらに筆者が大学院で経験した時間講師や教育実習の経験を基に、小学校で糸結びテストを活用する場合の課題と解決策を提案し、実現の可能性を検討した。

調査や分析の結果、糸結びテストは児童の手指の巧緻性を高め、自信を付けさせることができる教材であることが明らかとなった。さらに小学校第5学年の児童を対象に実践を行う場合は、ひもを用いて糸結びテストを行う、「ひも結びテスト」の実践が有効であると判断された。また、学校でひも結びテストの意図や目的を共有し、実践を行う時間を確保することや、児童の意欲を継続させるために、児童自身が自分の成長に気づけるように、教師が働きかけること、そして「ひも結びテスト」を行うことの意義を児童に伝え、製作ができる達成感を持てるようにするといった手立てをとることで、小学校における「ひも結びテスト」の実践は可能であると考えられた。

## 1. 研究の目的

小学校家庭科教育では、食生活や家族・家庭生活など学習内容が多岐にわたる。その中でも食生活や衣生活の分野では、調理実習や被服製作実習があり、基礎的・基本的な知識のみならず、その活動を遂行するための技能が必須となる。しかし近年、家庭生活の中で手指を使い、製作や調理をする機会が減少しているため、児童が技能を定着できずにいる。それに伴い、児童はそれらの活動を難しく感じてしまい、自信を持って活動しようとする態度や意欲も低下している。また家庭科の年間授業時数は学習内容の多さに対して十分とは言えず、限られた時間の中で児童たちに知識を伝え、技能を習得させていく必要がある。教師には、児童たちに手指の巧緻性を効果的に身に付けさせ、自信を持たせる工夫が必要となる。

そこで本研究は、家庭科の授業が始まる小学校第5学年の児童が、衣生活分野で初めて学ぶ裁縫の技能取得や定着において必要とされる手指の巧緻性を高め、自信を持つことを目指し、その手だてとして、太田らが考案した「糸結びテスト」<sup>[1]</sup>が、有効な教材となりうるか検討することを目的とした。さらに筆者が大学院で経験した時間講師や教育実習を基に、本研究の教材が小学校で活用することができるのかを考察し、実践の可能性を検討した。

## 2. 研究方法

はじめに、関連文献および学習指導要領を調査し、小学校家庭科に糸結びテストを取り入れる意義について検討した。次に大学生を対象に、こま結びに関するアンケート調査と「糸結びテスト」、「ひも結びテスト」を実施し、その考察を通して児童への有効な活用方法の検討を行った。最後に、現場で実践することを想定した場合の課題について検証し、その解決策を提案した。

## 3. 小学校家庭科に糸結びテストを取り入れる意義

### 3-1. 自信との関連性

自信は物事に見通しを持って、それを達成できるという期待を持っている、またそのために物事に挑戦して達成しようとする意志を持っている状態である。たとえ、その物事への挑戦が今までになかったとしても、類似した経験から見通しをもったり、その経験を活用したりして、自分にはできると推測することが自信をもっている状態と言える<sup>[2]</sup>。

自信の向上を考える際、自己肯定感、自己効力感、自己信頼感の3つの感情が重要となる<sup>[3]</sup>。自己肯定感とは、自分を否定しない感情である。自己効力感とは、挑戦しよう、また、できるようになろうとする感情である。自己信頼感は、自己を肯定し挑戦して、それらを繰り返すことで、自分を信じて行動しようとする感情である。これら3つの感情を積み重ねることで、自信を向上することができる。

教師は製作課題や教材を児童の力量を考慮しながら提供するとともに、児童に働きかけたり、支援したりすることが求められる。そして3つの感情を育める環境を授業や学級経営を通してつくりあげることで、自信の向上につながる。児童の実態を把握せず適切な働きかけができなければ、自信を低下させてしまう。その結果、児童は意欲が持てず主体的な製作活動を行わなくなる。

糸結びテストは、児童にとって難しい作業工程がなく、児童一人一人の手指の巧緻性を把握できるため、その児童の力にあった課題や支援を行うことができ、自己を否定せず裁縫の授業に入ることができる。また裁縫における基本的な技能の定着を補助するため、児童は自分ができるようになることを実感し、自己効力感をもつこともできる。これを繰り返して経験することで、自分らしく主体的に学ぼうとする姿勢が見られるものとなる。

したがって糸結びテストは児童が自信を向上することができる有効な教材といえる。

### 3-2. 学習指導要領との関連性

小学校家庭科の目標<sup>[4]</sup>には、実践的・体験的な活動を通して、実践的な態度を育てることが目指されている（図1）。これは家庭科が知識や考え方を学ぶのにとどまることなく、児童が学習したことを家庭生活で取り組み、よりよい日常生活を送れるよう行動するといった家庭科の特質を述べている。さらに日常生活に必要な基礎的・基本的な知識や技能は、児童一人一人の個性に合わせながら身に付けていくことが重要であることも学習指導要領では述べられている。

この基礎的・基本的な技能は、習得した単元の中で活用されるものだけでなく、次学年や中学校段階で活用されていく能力であり、家庭生活の中で活用されてこそ意味のある力だと言える。したがって教師は、児童が実感を伴いながら理解をし、技能を確実に定着するとともに、活用できるように働きかけていかなければならない。

糸（ひも）結びテストは、実践的・体験的な活動であると同時に、基礎的・基本的な技能である「縫う」、「留める」、「結ぶ」といった作業をより効果的に定着できる手だてである。また、児童が成長を実感しながら取り組むことができる活動であることから、裁縫学習の一方法といえる。

## 4. 糸・ひも結びテスト

### 4-1. 調査対象と調査方法

調査対象は、北海道教育大学教育学部旭川校の被服構成実習の講義を受けている、学部生（男子12名 女子15名、計27名）を対象とした。調査時期は、平成27年12月22日である。調査方法は、アンケート調査と、「糸結びテスト」及びアクリルひもを用いた「ひも糸結びテスト」の2種類のテストを実施した。テストの順番は、ひも結びテストを始めに行い、その後糸結びテストを行った。回答率は100.0%であった。

### 4-2. テスト方法

糸結びテストは、昭和33年に藤沢・太田らが手

指の巧緻性を測るために開発した<sup>[1]</sup>。テスト内容は、長さ10cmに切りそろえた木綿糸を5分間こま結びでつなぎ合わせ、結び目の数や正確さで巧緻性を評価するというものである。

テストで用いられるこま結びの結び方を、図2に示した（図中のタイトルは「片結び」と表記されている）<sup>[5]</sup>。図2の③ではAのひもの上にBのひもが乗っている状態であるが、AのひもをBのひもの上に乗せ結んだ場合、縦結びという結び方になる。縦結びは、結び方はこま結びに似ているが、結び目が十字の形になり、左右にひくと解ける結び方である。太田らの研究<sup>[6]</sup>では、解ける結び目の数は、その作業の質が低いものと論じられている。本研究では素早く、かつ正確に結べているかを評価している点から、縦結びはこま結びには含めないこととした。

また本研究では、教育現場でより容易に、繰り返し活用できる教材としての開発を目指すため、糸およびひも5本を、こま結びでつなぎ合わせるテスト方法で行った。ひもの場合を図3に示す（図中の写真は掲示用見本のため、テープでひもを台紙に貼ってある）。なおテストに用いる糸及びひもについては、事前にいくつかの種類を用意し、実際に筆者が結ぶことを通して、滑りやすさや太さ、入手のしやすさや日常的な使用頻度等を考慮し、総合的に判断した。その結果、赤の木綿糸20番手（マミーの四季、カナガワ株式会社）と、3mm太さのアクリルひも（メラクルコード、生川商店）を用いてテストをおこなうこととした。テスト時間は最大で5分間とし、時間内に結び終わらない場合は「結べていない」に分類した。なお糸結びテストを行う前に、映像を用いてこま結びの結び方について指導し、練習時間を設けてから、テストを実施した。

### 4-3. アンケート結果

アンケートの質問内容は以下の通りである。Q1性別、Q2学年、Q3専攻・分野、Q4利き手、Q5「こま結び」を知っているかどうか [(1)結び方を知っている] [(2)結び方は知らないが聞いた

## 第1節 家庭科の目標

### 1 教科の目標

衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にす  
る心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。

「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して」とは、(中略)

これらに関する実践的・体験的な活動を通して具体的な学習を展開することにより、より確実な知識及び技能を身に付けるとともに、知識や技能を活用して、身近な生活の課題を解決したり、家庭での実践を無理なく行ったりすることができるようにすることを目指している。

「日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける」ということは、衣食住や家族の生活などに関する内容について、実践的・体験的な活動を重視した学習をしていく過程で、日常の生活に必要とされる基礎的・基本的な知識及び技能を、児童一人一人のよさや個性を生かしながら身に付けるようにすることである。

基礎的・基本的な知識及び技能とは、中学校段階との系統性、一貫性を考慮した上で、日常生活に必要なもの、応用・発展できるもの、生活における工夫・創造につながるものとしている。

### 2 学年の目標

(1) 衣食住や家族の生活などに関する実践的・体験的な活動を通して、自分の成長を自覚するとともに、家庭生活への関心を高め、その大切さに気付くようにする。

(2) 日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、身近な生活に活用できるようにする。

(2)の目標は、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付け、それらを生活に活用する能力を育成することを明確にしている。

(中略)

そのため、実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図り、活用する能力を育成するようにする。

\*下線は筆者

図1. 小学校学習指導要領解説家庭編の抜粋

ことがある] [(3)知らない], Q6 [Q5が(1)か(2)の場合] どこで知ったか [(1)学校] [(2)家庭・家族] [(3)その他], Q7 [Q5が(3)の場合] 結び方の練習を行ってみて [(1)名称は違っていたが, 結び方を知っていた (名称を書いてもらう)] [(2)名称はわからないが, 結び方を知っていた]。

集計結果を表1に示す。「Q5-1 結び方を知っている」「Q5-2 結び方は知らないが聞いたことがある」「Q7-1 名称は違っていたが, 結び方を知っていた」「Q7-2 名称はわからないが, 結び方を知っていた」の項目に○を付けた, すなわちこま結びを知っていたのは13名(48.2%)であった。その中でこま結びの名称を知っていたのは5名(18.5%)である。別名で認識していたのは1名であり, 「固結び」という名称であった。このことから, 「こま結び」という名称は普段聞き慣れているものではなく, 日常であまり使用されていない結び方であることが分かる。結び方を知っていたのは, 「Q5-1 結び方を知っている」「Q7-1 名称は違っていたが, 結び方を知っていた」「Q7-2 名称はわからないが, 結び方を知っていた」の項目から, 9名(33.3%)であり, 半数以上が今回のテストによって始めて結ぶ経験をしたと言える。

以上の結果から, こま結びが日常生活の中では活用されておらず, また学校教育等を含めて, 教えられてこなかった可能性があり, 時代と共に伝承されなくなってきていることが把握できる。実際に児童にテストを行う場合, 児童も大学生と同様, 初めて聞く結び方であり, 初めて結ぶことが予想されるため, テスト開始前に結び方を丁寧に指導すると同時に, こま結びを活用する機会を与えることが重要となる。

#### 4-4. ひも結びテストの結果

糸およびひも結びテストの結果を表2に示す。実際にテストを行った順番に従って, はじめにひも結びテストの結果から述べる。ひもを結び終わるまでに要した時間は31秒~1分23秒であり, 平均時間は56秒であった。結び終わった最大時間と

最小時間の差が1分未満であったことから, 結びやすかったといえる。また, ひもを正確に結べたのは77.8%, その中でこま結びを知らなかったのは52.4%であった。したがって, 初めてこま結びを経験したとしても, ひもを用いたテストでは多くの者が結べることがわかった。

#### 4-5. 糸結びテストの結果

結び終わるまでに要した時間は51秒~2分55秒で, 平均時間は1分38秒であった。最大時間と最小時間の差が2分以上あったことから, ひもよりも結びにくいことが明らかとなった。また糸を正確に結べたのは44.4%と半数以下となり, 制限時間内に結び終わらなかった人もいた。糸はひもよりも結び目が見づらく, 自分が正しく結べているのかを確認しづらいためだと考えられる。ただし, 今回のテストでは, ひも結びテストを行った後, 糸結びテストを行ったことで, 被験者がひもの感覚とは違う糸に戸惑いを見せた可能性は否定できない。さらにひも結びテストでは, 練習時の前に映像を見せて結び方を認識させたが, 糸結びテストの練習時には, 映像を見せていない。そのためひも結びテストから糸結びテストに移り説明をしている間に, 結び方がわからなくなってしまった, 忘れてしまったことが結果に表れたとも考えられる。

### 5. 児童への有効的な活用方法の検討

#### 5-1. テスト用具

大学生を対象とした糸およびひも結びテストの結果から, 大学生にとっても糸をこま結びでつなげていくことは容易ではないことが明らかとなった。したがって, 児童にとって糸をつなぎ合わせる作業は大変難しい作業だといえる。またひも結びテストにおいても, 10cmの長さでは, 結び目をつくっていくうちにひもの長さが足りなくなり, 結びづらそうにしていた。本研究のテスト対象者は, 被服構成実習の授業を履修中の学生であり, 少なくとも週に1回は糸に触れているといっ

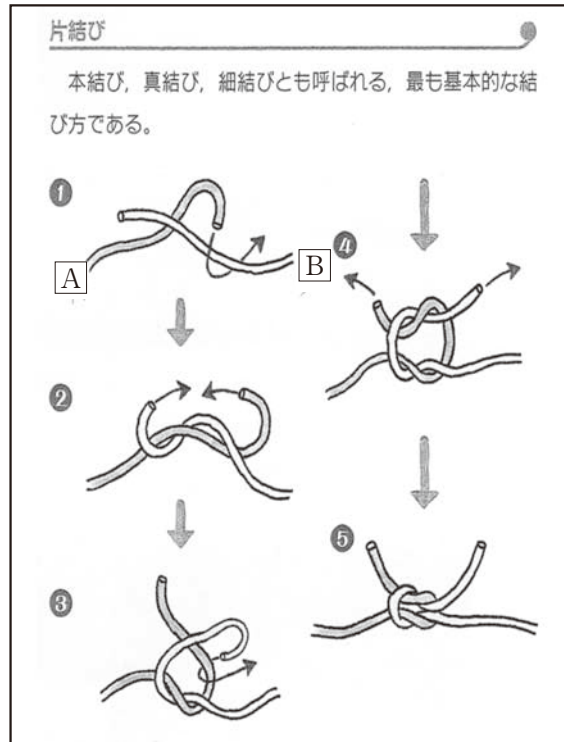


図2 こま結びの結び方 (一部筆者加筆)

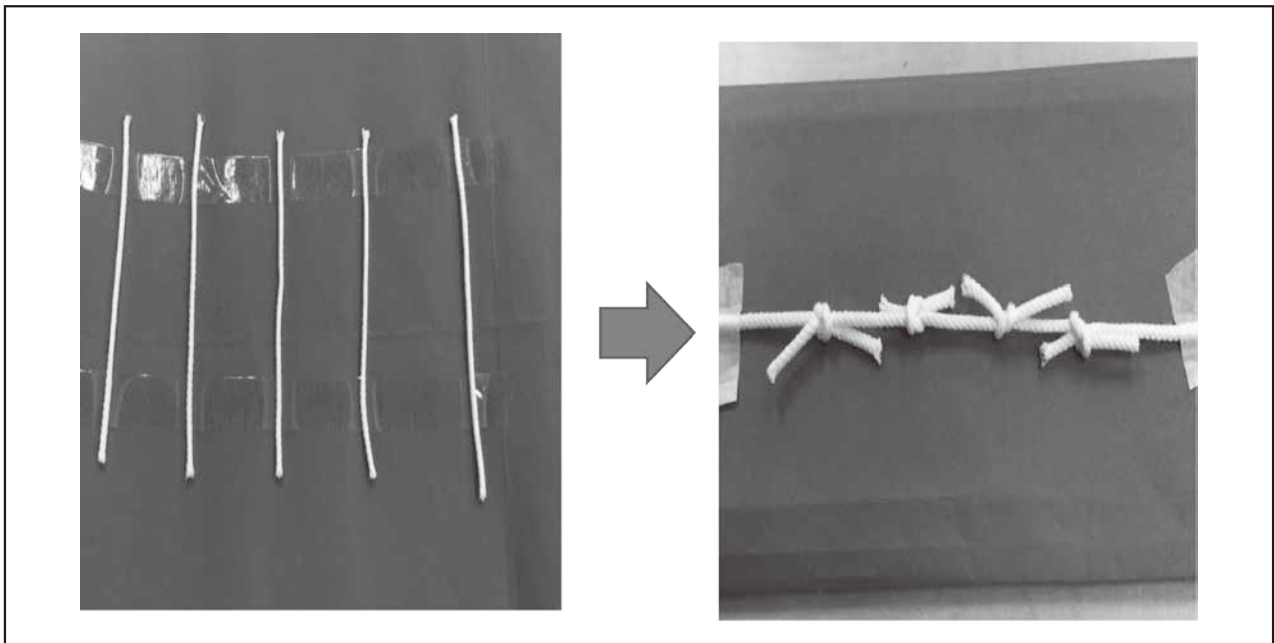


図3 テストの結び方

た実態がある。一方、小学校では第5学年から家庭科が始まるため、糸を使う作業を経験していない児童が一定人数いると推測されることから、糸を活用したテストを実施するのは難しいと言える。

ひもにおいては、普段靴ひもを縛っているため、ひもを扱う経験をしたことがある児童は糸を扱っ

たことがある児童よりも多くおり、親しみが感じられるものであると推測できる。また、繰り返し学習ができる教材といった観点から考えても、糸は一度結んでしまうとほどくのが困難であり、一度きりの活用となるが、ひも場合はほどくのが難しくなく、跡も付きづらいため、繰り返し活用

することができる。

したがって児童に糸結びテストを実践する際には、ひもを用いたひも結びテストを活用することが望ましい。

### 5-2. 結び方の練習

学級単位でひも結びテストをおこなう際、一度に多くの児童に対して結び方を伝えなくてはならない。そこで本研究で用いたように、結び方の映像を見せることが有効な手立てといえる。しかし、大学生を対象にテストを行った場合でも、一度映像を観ただけでは理解が不十分な様子も見受けられた。したがって児童が一度の説明で理解し、結べるようになることは望めない。繰り返し映像を用いるようにすることで、何度でも結び方が確認でき、映像を観ながら同時に結ぶこともできるため、結び方を習得しやすい。

また、こま結びで結ぶ経験を初めてする児童が多くいることから、丁寧な指導で結び方を習得させる必要がある。ティーチング・アシスタントを活用して、個別の指導の充実を図ることが大切となる。結び方が分かった児童には、他の児童に結び方を教えるよう言葉がけをすることで、互いに学び合い、助け合う雰囲気が生まれることも期待できる。

その他にも、結び方の説明が書いてあるワークシートや、完成例を班ごとに用意して、どのように結びつなげていくかを例示するなど、様々な方法が考えられる。児童がどの方法だと結び方を習得しやすいか、自分で選択できるよう多様な手立てを準備することで、主体的に実践が行える環境をつくることができる。

### 5-3. テストを実施するにあたっての留意点

ひも結びテストは児童の手指の巧緻性を把握するものである。また、繰り返し活用することで、技能の定着を助け自信を持てるようにするためのものである。そのため他者との競争をするものではない。波多野・稲垣らの研究<sup>[7]</sup>にもあるように、自信を形成する自己効力感、競争的な雰囲気の中

では醸成されない。このテストを通して、その時点で自分がどの程度結べるのか、以前と比べてどれくらい自分が成長したのかを実感できるものでなければならない。したがって教師は児童に他人の速さや結び目を意識するのではなく、お互いが成長していくために取り組んでいることを自覚させるとともに、結べないとしても、結べるように練習していくことが大切であるとの言葉がけを忘れずにしたい。

また本テストが評価に関わるものと認識してしまうと、素早く、正確に結ぶことができなかつた児童が自信を失い、被服製作に対して苦手意識をもつ恐れがある。あくまでも糸結びテストが、児童一人一人の被服製作実習を有意義なものにするための手助けとなる学習であることを認識させたい。

### 5-4. テスト時の留意点

テスト中は指先に集中して、結ぶ作業をする必要があることから、テスト前には静かな雰囲気をつくってから始められるよう、働きかけたい。結び終わった児童に対しても、他の人が集中して結んでいることを自覚させ、集中する姿勢を持続しつつ静かに待つようにさせる。ただしテスト時間を長く設定すると、早くに結び終わった児童の集中力が持続できないため、実態に応じて適切な時間設定をする必要がある。

また結び終わった児童が結んだひもを再度触ると想定される。正確さについて検討していることから、結び目に触ると手指の巧緻性を正しく把握できなくなるため、結び終わった児童には結び終わったひもに触らせない指示も強調して伝えることが望まれる。

## 6. 現場実践の課題と解決策の提案

平成29年3月に新学習指導要領が公示された。改訂に伴い、各学校は「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて教育課程を編成することを迫られている。この学びの過程では「何を知ってい



表1 アンケート調査の結果

質問	アンケート項目	人数
Q1-1	男性	27名
Q1-2	女性	15名
Q2-1	第2学年	23名
Q2-2	それ以外の学年	4名
Q3-1	生活・技術教育専攻	26名
Q3-2	それ以外の専攻	1名
Q4-1	右手	26名
Q4-2	左手	1名
Q5-1	結び方を知っている	1名
Q5-2	結び方は知らないが聞いたことがある	4名
Q5-3	知らない	22名
Q6-1	学校	3名
Q6-2	家庭・家族	2名
Q6-3	その他	0名
Q7-1	名称は違っていたが、結び方を知っていた	1名
Q7-2	名称はわからないが、結び方を知っていた	7名

表2 糸結びテスト・ひも結びテストの結果

糸結びテスト		ひも結びテスト	
平均時間	1分38秒	平均時間	56秒
最小時間	51秒	最小時間	31秒
最大時間	2分55秒	最大時間	1分23秒
縦結び	11人	縦結び	2人
すぐにとれる/結べていない	4人	すぐにとれる/結べていない	4人
糸を正確に結べた人数 12名(44.4%)		ひもを正確に結べた人数 21名(77.8%)	
糸及びひもを正確に結べた人数 10名(37.0%)			

るか、何ができるか」という知識および技能を用いて、「何ができるようになるか」といった思考力・判断力・表現力を高めることに重きがおかれている。この学習過程の中で児童にとって深い学びとするためには、短い時間で知識および技能を定着させ、活用する時間を十分に確保することが重要となる。したがって限られた時間の中で基礎

的・基本的な知識および技能を確実に身に付けていける工夫をしなくてはならない。小学校家庭科においても、限られた年間授業時数の中で、基礎的・基本的な知識および技能の定着が望まれる。

またこの学習過程では児童が自ら主体的に学びに向かい、他者と学び合うことで深い学びにしていくため、児童の学習意欲が維持されなくてはな

らない。この状況下においてひも結びテストを実践していく場合、いくらかの課題点がみられる。ここでは、その課題点をすべて網羅することはできないが、筆者の大学院での実習経験を基に、現状で考えられる課題点について挙げ、その課題に対する解決策を明らかにしていく。

### 6-1. 学校の教育活動に組み込む視点および時間を生み出す工夫

小学校家庭科では第5学年で60時間、第6学年で55時間という限られた時間の中で授業実践をしなければならない。そのため衣生活領域で活用できる時間は少なく、特に初めて授業で手縫いに触れる5年生の導入段階でも、8時間程度の時間数で授業をおこなうこととなる<sup>[8]</sup>。また他の領域においても問題解決的な学習の充実を図ろうとすると、どの学習時間も題材における指導時間を余すことなく生かさなければならない。ひも結びテストが家庭科の授業時間内で継続的に取組めることが本来望ましいが、毎時間の授業で取組むことは難しい。したがって今以上に時間の確保を工夫する必要がある。

そこで朝の学級での時間を活用する方法が考えられる。各学校で朝の時間を有効に活用しようと、読書やプリント学習の時間に当てているが、朝の時間に学級でどのような活動をするのかは各学校で異なる。そこで実践の意図や目的を学校で共有し、ひも結びテストの時間を確保する。その際保護者にも意図や目的を伝え、実践に対する理解と児童たちの成長を実感できるよう、学級通信や家庭科通信を用いて情報を発信する。

他の方法としては、各教科での学習時間の一部を活用することが考えられる。学習内容によっては1単位時間かけなくても十分な場合が現実的にある。そこで1単位時間の中での残りの時間を活用し、ひも結びテストを行うことで時間を確保することが可能となる。ただしこの時間を計画的につくりだそうと各教科の時間を無理やり短くして実践を行うことは好ましくない。また、この方法は定期的に行うことができるものではないが、時

間の確保が課題の小学校現場では、有効な方法の一つと言える。

### 6-2. できる実感をもたせる取組

児童たちの裁縫の授業における関心は高く、実習を行いたいという意欲的な姿がみられる。しかしながら裁縫の授業で初めて糸や針を持つ児童が一定数おり、針や糸を使った経験はあるものの日常的に活用している児童はほとんどいない。また家庭での生活経験や手遊びなど手先を活用する機会が乏しいこともあり、児童の手指の巧緻性は高くない現状がある。このような現状の中で裁縫の授業を行うと、はじめは意欲が高かった児童も、円滑に針や糸を使用できず学習意欲を失う。その結果、裁縫における技能の個人差が広がる。児童が裁縫の題材を抵抗なく始められるとともに、学習意欲を持続させたまま裁縫の授業に取組めるような手だてをとることが必要となる。

児童の意欲を持続させるために、できる実感や達成感を得られるような工夫が有効となる。そこで児童がおこなったひも結びテストを保管しておく。そして保管したものを定期的に確認することを通して、児童が成長を実感できるようにする。その際結び終わるまでの時間の長短の変化のみに注目させるのではなく、結び目の丁寧さや正確さ、ひもの長さの均一さなど様々な点を取り上げ、成長している点を評価することが重要となる。

### 6-3. 達成感や意義を認識できる取組み

児童たちにとってひも結びテストが教師にやらされているものではなく、必要感のあるものという認識で取組むことによって効果的なものとなる。したがってひも結びテストを通して、児童たちが手指の巧緻性を高めることの理由や利点について把握できる指導をすることが望まれる。

そこで教師は手指の巧緻性を高めることで裁縫における基礎的・基本的な技能を効果的に身に付けることができ、作れるものをつくるのではなく、作りたいものをつくれるようになることを実感できるようにする。また手指の巧緻性が高められる

と、裁縫の技能だけでなく、他の分野やものづくりなど幅広く活用することができることを認識させる。

具体的には、布物のよさを児童に見つけさせ、どのようなものを作りたいか自己の課題を設定させる。その後ひも結びテストの実践、裁縫の基礎的・基本的な技能の定着を図ることを通して、自分がつくりたいものをつくることで、再度制作活動をしたという意欲を持たせるようにする。

## 7. まとめ

本研究は、児童に手指の巧緻性および自信をつける衣生活の教材開発を目指し、大学生を対象に、アンケート調査と糸・ひも結びテストをおこない、児童にとって有効な教材となりうるか、妥当性を検討した。さらに小学校での活用の可能性について現状の課題から考察し、実践の可能性について検討した。

文献調査から、糸結びテストは児童にとって難しい作業工程がなく、児童一人一人の手指の巧緻性を把握でき、裁縫における基本的な技能の定着を補助するため、児童ができるようになることを実感し、自己効力感をもつことができるため、自信を向上することができる有効な教材といえることがわかった。

アンケートの結果から、大学生の中でこま結びを知っている者は約4割であり、名称まで知っていた者は2割程度であった。本研究の調査において、初めてこま結びの名称や結び方を知った大学生が過半数であったことから、こま結びは児童にとって、より馴染みのない結び方である可能性が示された。

大学生を対象とした糸およびひも結びテストの結果、大学生にとっても糸をこま結びでつなげる作業は容易ではないことがわかった。またひも結びテストよりも糸結びテストの方が、正確に結べていない人数が多かったことから、ひもよりも結び目が見づらく、正しく認識して結ぶことができなかったと思われる。したがって児童にテストを

おこなう場合は、ひも結びテストを活用することが有効であるといえる。

小学校でひも結びテストを実践していく場合、学校でひも結びテストの意図や目的を共有し、時間を確保することが重要となる。さらに児童の意欲を継続させるために、児童自身が成長に気づけるように教師が働きかけること、そして「ひも結びテスト」を行うことの意義を伝え、製作ができる達成感を持てるようにするといった手立てをとることで、小学校における「ひも結びテスト」の実践は可能であると考えられた。

## 引用・参考文献

- [1] 藤沢キミエ・太田晶子, 被服技能を測定する一方法(糸結びテスト)について, 家政学研究, 1959, Vol.6, No.2, 66-72
- [2] 川端博子, 被服製作学習が育むもの, 日本被服学会誌, 2008, Vol.52, No.1, 7-10
- [3] 桜井茂男, 自己効力感が学業成績に及ぼす影響, 教育心理, 1982, 35, 140-145
- [4] 文部科学省, 小学校学習指導要領解説家庭編, 日本文教出版, 平成20年8月
- [5] 図画工作教師用指導書 材料・用具編, 1・2上/1・2下, 日本文教出版, 2015(平成27年)3月10日
- [6] 藤沢キミエ・太田晶子, 被服技能を測定する一方法(糸結びテスト)について(第2報), 家政学研究, 1960, Vol.7, No.1, 44-48
- [7] 波多野諠余夫・稲垣佳世子, 無気力の心理学, 中公新書, 1981
- [8] わたしたちの家庭科5・6 学習指導書教科書解説編, 開隆堂, 2015(平成27年)2月5日

(栗山 凌 旭川校大学院生)

(小松恵美子 旭川校准教授)